日本臨床外科学会学術集会

研修医セッションで最優秀賞と奨励賞

徳洲会グループから65演題と存在感発揮

第87回日本臨床外科学会学術集会が11月20日から3日間、「心　技　体」をテーマに都内で開催され、徳洲会グループからの発表は65演題に上った（うち4演題は同会場で併催の第35回外科漢方フォーラム学術集会）。研修医セッションでは19演題を発表し、宇治徳洲会病院（京都府）の中島太朗研修医（2年次）が最優秀賞、東京西徳洲会病院の荻原佑城研修（1年次）が奨励賞をそれぞれ受賞、専攻医セッションでも9演題の発表を行い、存在感を示した。学術集会特別企画やシンポジウム、パネルディスカッション、重要演題、要望演題などでも多数の発表を行った。

中島・宇治病院研修医が快挙



右から荻原研修医、今学術集会の吉田寛会長（日本医科大学大学院教授・消化器外科部長）、中島研修医



全国から多数の外科医が集結し知見を共有

最優秀賞を受賞した中島研修医は「腹腔鏡縫合キットでの手技上達における外科医によるフィードバックの効果についての検証」がテーマ。腹腔鏡を用いた縫合手技に関し、外科医のフィードバックを受けることで効果的に習得できるかどうかを検証した。具体的には初期研修医を、フィードバックを受ける群（FB群）と受けない群（non-FB群）にランダムに割り付け、腹腔鏡縫合キットでシミュレーションを行い、ラーニングカーブの解析を行った。

ラーニングカーブの頂点（学習の飽和点）をcompetenceとし、そこに到達するまでの試行回数を比較。統計解析の結果、有意差なしという結論に至った。「FB群の方がcompetenceに至る試行回数が少なく、効果的に学習している可能性がありますが、そこまで強い結論は言えない結果となりました」とまとめ、FBの方法を細かく定義しなかったことなど有意差が出なかったさまざまな可能性を考察した。

表彰式後、中島研修医は「発表の技術や統計解析の手法など細かく教えていただいた指導医である当院消化器外科副部長の我如古理規先生や、協力してくれた研修医の仲間のおかげです。徳洲会の研修は臨床のイメージが強いですが、学会から評価いただき、学術活動も盛んであることをアピールできて良かったです」と喜びの声を上げた。

奨励賞を受賞した東京西病院の荻原研修医は「シミュレーショントレーニングから部分執刀へ－TAPP腹膜閉鎖部分執刀の経験－」をテーマに口演。同院は研修医に対してシミュレーターでの課題クリアを条件に院内資格を付与し、消化器外科ローテート時に腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術（TAPP）の腹膜閉鎖の部分執刀を認めている。

手術動画を供覧しながら同院の手技トレーニングについて、針の把持、縫合、結紮の3パートが定型化されていることや禁忌の規定など紹介し、「指導医とのシミュレーショントレーニングを通じて、患者さんの安全性に配慮しつつ、研修医の立場で執刀機会を得ることができたのは貴重でした」と結んだ。

荻原研修医は「大変光栄です。本発表は指導医の先生方をはじめ、看護師やメディカルスタッフの方々の協力なしには成し得ませんでした。早期から執刀経験を積める当院の教育体制は大きな支えです。今回得た学びを診療に生かし、より良い医療を提供できるよう努力を続けてまいります」と成長を誓った。

研修医セッションの表彰タイトルは他に優秀賞のみ。3つの表彰のうち2つを徳洲会が受賞、存在感を大いに示し、臨床に加えて学術活動に関しても熱心な指導医や周囲のサポーティブな環境を印象付けた。

外科医不足に対応しセッション

外科医不足や外科希望医師の減少などが深刻化している状況を受け、日本臨床外科学会は「学術集会特別企画」で、持続可能な外科医療体制の構築をテーマとするセッションを多数企画、徳洲会も複数の演題を発表した。

岸和田徳洲会病院（大阪府）の片岡直己・外科主任部長は「当院で実践している、若手を『承認』する働き方改革」、宇治病院の我如古副部長は「外科教育における多様な実践：制度と現場のはざまで」、同院の藤岡祥恵・外科医師は「外科医継続の重要性とその戦略－継続は力なり－」、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の赤羽祥太・腎移植外科兼消化器外科医長は「若手外科医にとって魅力的なキャリア形成とは何か－実体験をもとに考えるキャリアの多様性とその提示の意義」、同院の水嶋由佳・外科医師は「海外医学部出身女性外科専攻医として考える『心・技・体』のバランスとキャリア形成」をテーマに口演した。

シンポジウムでは宇治病院の長山聡・消化器外科部長が、“外科医が取り組む基礎研究”として「大腸癌微小転移巣はどのようにして肉眼的転移巣へと進展するのか～播種細胞（DTC）オルガノイドの解析より見えてきた顕在化メカニズム～」をテーマに発表。中部徳洲会病院（沖縄県）の内間恭武・消化器外科部長は「ロボット支援下手術全盛時代における腹腔鏡下大腸切除の再定義－地域医療と外科教育の視点から－」をテーマに、ロボット手術と腹腔鏡手術を適切に使い分ける運用や教育体制について発表した。

回顧この1年 ❹ グループ90病院へ拡大 地域医療の堅持に邁進

徳洲会グループ拡大の1年――。この形容がふさわしい2025年だった。事業承継・M&Aにより10病院、指定管理者制度によって公立の1病院が仲間に加わり、徳洲会グループは90病院に拡大した。“生命だけは平等だ”の理念を掲げ、「いつでも、どこでも、誰でもが最善の医療を受けられる社会」の実現を目指す徳洲会は、グループの発展・拡充を図りながら地域医療の堅持に邁進している。



指定管理に関する協定書を手に東上理事長（右）と小園裕康・公立種子島病院組合管理者（南種子町長）

事業承継・M&Aに関しては、東上震一理事長が『徳洲新聞』1477号（2025年2月3日付）の「直言」で、次のように明記している。

「徳洲会が行うM&Aは、強いものが弱いものを飲み込む資本主義的経済活動とは全く異なるものです。つねに医療の受け手（患者）の利益を最善化することが、徳洲会の基本的な考え方です。徳洲会の運動で一人でも多くの人を幸せにすることが、創設以来一貫した私たちの医療に対する向き合い方です」

その地域に必要な医療を継続し、さらに質を高めて発展させていくことで、患者さんの利益を最善化し、一人でも多くの人を幸せにする。そのために必要であればM＆Aを行うというスタンスだ。

今年、徳洲会グループに加わったのは、2月に札幌真駒内病院、野田総合病院（千葉県）、4月に医療法人社団森と海東京・東京蒲田病院、医療法人社団空と大地・大崎病院東京ハートセンター、7月に正和病院（大阪府）、9月に医療法人社団晃悠会・ふじみの救急病院（埼玉県）、同法人・むさしの救急病院（東京都）、10月に公立種子島病院（鹿児島県）の指定管理、11月に社会医療法人母恋・日鋼記念病院（北海道）、同法人・登別記念病院（同）、同法人・天使病院（同）の11病院。

「今をグループ成熟に向かう第２の勃興期に」

先の直言で東上理事長は「今をグループ成熟に向かう第2の勃興期に」と宣言。そのためグループの拡大とともに、「許可病床という医療を提供する権利」を患者さんのために使い切る施策などを推進し、財政基盤の強化にも全力で取り組んでいる。

札幌真駒内病院は80床の急性期病院、野田総合病院は350床の基幹病院、東京蒲田病院は180床の急性期病院、大崎病院東京ハートセンターは88床の心臓病の専門病院だ。正和病院は165床のケアミックス病院。ふじみの救急病院（20床）とむさしの救急病院（132床）は地域の救急医療などの充実に注力する病院だ。



基幹型臨床研修病院や地域がん診療連携拠点病院などの指定を受けている日鋼記念病院

公立種子島病院は62床を有し、種子島の南部圏の医療を支えている。徳洲会が指定管理者として運営する病院は計4病院となった。日鋼記念病院は室蘭市に位置する348床の地域基幹病院で、登別記念病院は120床の地域密着型病院、天使病院は284床の周産期医療に強みをもつ総合病院だ。

学会長として“挑戦”呼びかけ

日臨技近畿支部医学検査学会で江口・宇治病院事務次長

第64回日臨技近畿支部医学検査学会が11月22日から2日間、京都市で開かれ、宇治徳洲会病院（京都府）の江口光徳・事務次長（臨床検査技師、京都府臨床検査技師会会長）が学会長を務めた。「Next Challenge ～変動する時代への適応と深化～」というテーマを掲げ、同時開催の日本臨床検査医学会近畿支部総会、日本衛生検査所協会近畿支部学術研究発表会との3団体共同セッションなど充実したプログラムを企画するとともに、自ら座長を務めるなど精力的に活動。2日間で1,231人が参加、盛会に終わった。



学会長講演を行う江口・事務次長

大会テーマと同じタイトルの学会長講演も実施。院内外で多様な活動を行い、さまざまなことに興味をもつこと、新たなことにチャレンジする大切さを強調した。医療を取り巻く環境の変化や、自身も4月に臨床から現在の管理部門に異動したエピソードを披露し、「10年後、20年後に向けて、ぜひ“ネクストチャレンジ”を考えてほしいと思います」と締めくくった。大役を果たした江口・事務次長は「参加して良かったという声を数多くいただき、実行委員全員の努力が実ったと実感しています」と胸をなで下ろした。



会では関西のグループ病院が18演題を発表

湘南鎌倉病院が初の試み

CVC研修受講者を院外公募

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は10月25日、初めて受講者を院外公募し、CVC指導者養成コースとCVC実践セミナーを開催した。



午前と午後をとおして全体を統括する太田部長（左）

日本医学シミュレーション学会主催の研修で、同コースは中心静脈カテーテル（CVC）挿入の安全な手技と指導法を習得するための研修プログラム。同セミナーはCVCの安全教育を目的としたシミュレーターを用いたトレーニングだ。午前中に同コースで学んだ受講者が、午後には同セミナーで講師を務めた。

CVC手技は、動脈穿刺や気胸といった致死的な合併症をともなうリスクがある。エコーガイド下で針先を「お迎えする」ように誘導する穿刺法を習得することで、手技の安全性と成功率を高めることが可能となる。

太田隆嗣・麻酔科部長は「これまでの活動で院内に十分に浸透し、指導者も確保が進んできました。院外へも公募範囲を広げることで地域の若手医療従事者に対し、徳洲会グループの教育機関としての存在感を示すとともに、地域の臨床教育に貢献することを目指しています」と強調。「医療が産業化された時代、質と安全が求められています。こういった安全な手技教育は初期研修医の必修にしており、不安なくエコーガイド下CVCができるように指導しています」と力を込める。